



佛指十系卦集

雜

5
1645
5



門 5
1645
卷



佛譜十家類題集雜之部

○目錄

神祇 一
 親教 法樂 徑文 三
 慶祝 慈 八
 餞別 別 離別 送別 十
 紀行 旅泊 羈旅 十三
 名所
 地名 旧跡 十八
 取思 懷 旧 懷古 共 六
 述懷 贈答
 後投 共 八
 畫讚 甲
 詩文 詞 和 考 甲 五
 志 事 甲 八
 祈禱 甲 八
 每常 甲 九
 追善 悼 五十
 雜題 每季
 題 並 跋 句
 迴文 卒 一

八十年の
聖廟

梅ははみぬお風おたふると自然 言水

三遠奉納

其角

春日法樂

其角

宰府奉納

其角

修近宮

其角

外宮

其角

内容
は解つ
をねえん

三遠奉納

夕の梅は 赤ももまろし 井 修山

春日法樂

家々のあま居よろく 大 社

宰府奉納

不揃海や 編 房よしあけ焼くを

弁の縁酒匂ハ 橋よたりまきり

々々日秋の 扱借を 〇〇〇〇

守梅の 花ひ 〇〇〇〇 那 老 賣

元禄十四年二月廿五日 聖廟八百餘御年忌

於龜戸御社詩歌連俳令與行一座

梅ねや 〇〇〇 〇〇 〇〇 八 百 所

室永開元奉幣使御代奉の人のあま

や 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

十八の羽井はひよとてあつる
其角
井ませしかつたもとありしの美
嵐雪

信濃催馬樂

君まのいねのたて人行渡のまはるは
うゑとて
稲まよさしつかぬ井ふう園作やま

おくま

とるまに雁とてあまのちる屋の井

希因

崔柄天神
奉納

これとてひまの松よりちるう
井田まの報ううま松まこちちるうや
まよとてうま大くちる成まう
くはまのあまううけるうのなまうか

嵐雪

乾
二

山之系

くし井まをて天下をまうのまらる

其角

北野法系

影向の松引をてうとてうの井

希因

住吉奉納

清の松杭を接しをてまを

来山

神明奉納

ふまのうたれたいとてを雪を降

住吉奉納

依しておむ時こちのちもまうの屋

、

〇

まの白ふえよま編のうの雪

住吉奉納

かまうのち中坂まてもまら海井上

小井

本るううの陰まうまをうのち時

麦林

香宮奉納

出代まの井まのううのちけらる

、

井路山 深貝と号す十粒の井の秋
香良例 希因
体勢 希因

○尺教

法樂 經文

古寺や修植す一本 芭蕉

え福己の堂し大佛再建

卯を中つら大佛のうらら

山海徑

食良山の谷重く鳴きさすし

三井晚鐘

札披りし懐ひをけられのう

悲是吾子の
こころ成

似我増しるるぬるも死は法也

山 佑徳

神力品
現大神カ

嚴宥院殿の大法華成東叡山と稱せり

又月るのそも体むる法の一色 其角

法のそれをさすやうな成りたる

正月己巳布施の毎方天、
信修の奉也

玉模ふるやうなてや 布極筆

佛あり大海に入城し終るるなり
佛もとりやうなてかかるとも
さうなれどもふのそなり

佛とて標のそよ月あま

法華經新寺念佛堂

一人のそりにてよ秋のそ

所合羽の條一や後世の言は 其角

大慈心院のそと成るゆへに

薩門の園よりあてこらしめ

望まじくさゆぬく際のはかり

手よきと 修りよきゆめをひら

三列の酒井村観音奉納

ゆき 掃や 解もかゝる言ひ

廣詞止觀は一目之羅不能得鳥得

鳥之羅唯是一日ゆめをくらし

龍樹菩薩の禪陀伽王の對して

解四

得正觀音
像

解

色極極始維脱後垢若のみの

為瘡のいさるめは 法法 其角

如是果のそとを

二子山こみひろくし栗のら

投記品無有魔事

くりりしうゆらて 彼居の夕日乾

南京茶抄寺の臨るまき

涼風巾 眠満く舟の茶抄と 言水

和歌式部の本原本をよみ一里

納のそとを 徳なるまつり 嵐雪

南無大悲觀世音菩薩

連

素菜のみやゑと申すの老女娘を

嵐雪

甚舊の墓をうのほろひて

任持して拂ひ果るるの

草拵上人の岩室

慈のうらみ居らりあはるる

襖栗や手にさける法

目蓮の徳も人のさへ

底志の人のさへ

能

悉くさへさへさへさへ

五

法花をゆかりて

はとるゑと釈もつゝぬ大徳が

嵐雪

歸依法肉迷の菜を喰ふ

飯のやうに後をえさるる

我等今日聞佛音教觀喜踊躍

と讀誦しなすて

咳くつゝと念佛ゆかりの柄抄

一切衆生悉有佛性

塗人の汚かくさるるや

来山

まきまきの一里眉毛は秋の霞

燕村

妙義山

三輪山
女入堂

木食堂

陀柳

百合もその娘らうらやまほろくは 麦林

たぐい表も栗を密拵も玉の時

我月も柳と見え涼しきよ

賀祝

新宅を

むらめ倉

貞佐新宅

よきとあや雀も傍らうら背への娘 芭蕉

鶯啼や赤子の頬を吸時ふ 其角

けしやを清原もそはひて枝の露

梅津氏の祖父古坂表の室初はうそ

箱六

御感状 御太刀成り哉せしむる正月

十七日の朝とや佐牛上校増後賀

の御賀十七人さきと正月十七日

そむたりて

端持を文彦編や梅の赤 其角

君の景のありとくさ成梅もそは

峰も一宿の秋乃嵐より 素堂

法林のそふよふはそは

ふきの帯もそぬたよりや梅も咲 来山

梅のそきて月もひりきり 売の松 蕪村

八十八の笑

利菱

たんやや 露もまきまの木の乳 芭蕉

祝産育

幼年の乳のそりしにけぬが
先脱へ梅成るる所のまきまのり
たうまの皮は梅の結けみり 其角

女を移しひてまきまのり

か又戻りしに結けみの結け

衆嵐入懐のそりしにけ

引はまておをくらむる嵐の結

年の年々の月々の日々の付

うきん令

競る時又入脱身のいさこころ那

津氏か犬齧

まきまのり外はまきまのり 来山

おをまきまのりあそび人の白紙は

おをまきまのりあそび人の白紙は 其角

梅後の夜

おをまきまのりあそび人の白紙は

おをまきまのりあそび人の白紙は

ト后と夜

おをまきまのりあそび人の白紙は 其角

戀

うらやま

恋

恋

恋

待

不

海よふらふとて

うつたをきくおののこまの減る

雲をたぐひて

身をたぐひて

我をたぐひて

まぬ人をたぐひて

国の方よさるる

たぐひて

芭蕉

沾徳

言水

其角

雜八

出

井

待

恋

恋

恋

恋

恋

恋

あつたをきくおののこまの減る

雲をたぐひて

身をたぐひて

まぬ人をたぐひて

国の方よさるる

たぐひて

あつたをきくおののこまの減る

雲をたぐひて

身をたぐひて

まぬ人をたぐひて

国の方よさるる

たぐひて

其角

来山

来山

其角

嵐雪

休ん糧本所非北ふらて地をさ
川にさふさふりより古風さうし

川に流れてまゝあるまゝの女は月を日

を粉々にほろろとすりしそ汗拭

ほろろのやうな月夜や時を

傾きやうとく彩む中へと

けりせいのうと流急つとよ川を

解り後産くふおの入るる

乙子のはつと折る揚屋入

嵐雪

麦林

希因

来山

希因

希因

九

錢別

多別 難多 送ぶ

梅の葉よりこめを包みとるけ

むくさう障のまゝのまをひく

おまのね陰よりうらまをぬん

汐平はけきさく水川をぬん人

おまのね陰よりぬぬまのね

紫の蝶をさうとんまの上

まのね陰よりぬぬまのね

芭蕉

素堂

沾徳

具角

芭蕉のま

別芭蕉

修徳

修徳

七月下

修徳

又方々を花のころろをりたるに
 志川の雲より人らもさるるなり
 けしき持さよまふよふさ一具
 ともむけのついで居よまされて
 そのおまふのころろに
 おまふのついで居よまされて
 岸合舟をよまふついで
 涼よまのころろや速と金
 友成もさるのついで居よまされて
 活活とさるよまふついで居よまされて

其角
 芭蕉
 其角
 其角

又方々を花のころろをりたるに
 志川の雲より人らもさるるなり
 けしき持さよまふよふさ一具
 ともむけのついで居よまされて
 そのおまふのころろに
 おまふのついで居よまされて
 岸合舟をよまふついで
 涼よまのころろや速と金
 友成もさるのついで居よまされて
 活活とさるよまふついで居よまされて

其角
 芭蕉
 其角
 其角

湖舟独海

舟更々の船のこゝろよりさうなれが

其角

秋久松南山

昔も秋久の浪もやから下流

秋久松南山

古くは梅あり入るよこころ

猶よあゝせの舟も回も磯のれし

嵐雪

乾氏傳子

ささくの浪より岩よ土用東風

来山

ささくの浪より岩よ土用東風

舟更々の船のこゝろよりさうなれが

昔も秋久の浪もやから下流

竹溪伝子

古くは梅あり入るよこころ

燕村

素堂

芭蕉

舟更々の船のこゝろよりさうなれが

其角

昔も秋久の浪もやから下流

古くは梅あり入るよこころ

猶よあゝせの舟も回も磯のれし

ささくの浪より岩よ土用東風

舟更々の船のこゝろよりさうなれが

昔も秋久の浪もやから下流

古くは梅あり入るよこころ

猶よあゝせの舟も回も磯のれし

ささくの浪より岩よ土用東風

燕村

素堂

又そと
信濃下向
仕官の事

信濃やんて又おもしろく秋の露
佑徳

其羽たふさかののりゆり

系部を

馬牡丹おのやわつてその大なる
其角

春風くちまふゆきをさし

信濃をさし
蕪村

友の事もおもしろくおの
来山

しるまふやまの雪をたけ
おの

井風やせまてはらりの雪も

紀行

旅泊 野嶽

旅宿を

九月の月の子つら
芭蕉

秋の夜は静か
、

山吹の影は
、

涼風を
、

月影を
、

閑さ
、

閑さ

武隈	くさくさの猿もさうさうな雪の煙	芭蕉
二	草花の女ありさうさうな雪の煙	
三	山嶺もさうさうな雪の煙	
四	月夜にけりしのさうさうな雪の煙	
五	橋よりけりさうさうな雪の煙	
六	ほろほろあまのこもさうさうな雪の煙	
七	あまのこもさうさうな雪の煙	
八	石舟もさうさうな雪の煙	
九	山嶺もさうさうな雪の煙	
十	なすもさうさうな雪の煙	

新十

素堂	あまのこもさうさうな雪の煙	素堂
二	山嶺もさうさうな雪の煙	
三	月夜にけりしのさうさうな雪の煙	
四	橋よりけりさうさうな雪の煙	
五	ほろほろあまのこもさうさうな雪の煙	
六	あまのこもさうさうな雪の煙	
七	石舟もさうさうな雪の煙	
八	山嶺もさうさうな雪の煙	
九	なすもさうさうな雪の煙	
十	あまのこもさうさうな雪の煙	

嵐雪

川の傍	友の目やと見え山麓のいさひうり	嵐雪
山中温泉	かいつてきき希風入るや藤の葉	希風
伴走山中	さのさけしきよき遠くはくらくか	
大和橋	短あや人あや余ふ大和橋	麦林
鶴崎石	このるけくらしきあけぬれさき	
西行石	尾まふふあはささきさきさきさき	
伴走山	さき解の系圖さきさきさきさき	
八坂	あきさきさきさきさきさきさき	
朝熊	吹てしきさきさきさきさきさき	
穀う岳	ほくさきさきさきさきさきさき	

寺捨山	ききたれや寺捨山のけりし	
加太彦彦	くさく又まの孫もさきさき	
三浦	さきの杉のむらや夏の穂	
三浦	空もさきさきさきさきさき	
三浦	下もさきさきさきさきさき	
三浦	娘人又さきさき娘の解	
三浦	指さきさきの娘もさきさき	芭蕉
三浦	あつさ山やぬきさきさき	
三浦	日さきさきさきさきさき	其角
三浦	さきさきさきさきさき	嵐雪

三浦の
三浦の
三浦の

和列子尾
 村々
 風たよにまぬやらのまのまはらら
 舟さししはらほの風のまむる
 てる成さしほの雪れりたりな
 花のほろくしんかたる娘が
 けり弱のまゝ無むやうくこれ
 喰りこえくくもけり秋を
 雪ふるやし種をり落の川流し
 控らんくまの明りし舟の更
 志さうりゆと見の路あらけ

芭蕉

野五

湖の野々
 かくはむり角うりふよ浪産ぬ
 控のまぬれんも水の本雲の娘
 舟さししはらほの風のまむる
 てる成さしほの雪れりたりな
 花のほろくしんかたる娘が
 けり弱のまゝ無むやうくこれ
 喰りこえくくもけり秋を
 雪ふるやし種をり落の川流し
 控らんくまの明りし舟の更
 志さうりゆと見の路あらけ

希因

出題
 希因
 希因

東山
元角
牛田

二月十日
上

海
下
山
風

ふと深
山
西
川
程
石
足
く
嵐
雪

手紙

片
花
山
村
芭蕉

桐葉屋	月のあかりをみる室の田舎りなり	希因
旅石	富士の雪煙を海屋よ眺むるなり	其角
露	大雁あふむちかき雪の早月夜	言水
二月十日	富士の嶽影のたまひて参り	其角
系鼓	を踏むるを尾ふるをけよ新やけ	
鳴り	汗流とるをありきとありとも	来山
本橋山		
鳴り		

名所

地名 舊跡

松樹乃 志のつき月の名所なり

西橋	夕晴やしらくくは涼むはりの	
小倉山	大ひるやししけりてしし	
	侍や笑むるは月夜の友	
	三年の門をわたりての月	
	くくつむる人なり	

柳系	新まよふ柳の浦へて追付く	芭蕉
新山	暮宿りてまゐりた辺の橋よりよ	素堂
三橋	若くし人あはれまゐりて人の	、
石山	をまゐりて柳をむく社とて	、
武蔵野	長瀬は河そのふりも柳をむく	、
二又河	まゐりて柳をむく	、
みちく	柳をむく	、
	田一板柳をむく	、
	名月や花のまゐりて	、
	柳風の橋をむく	、
	柳をむく	、
	石橋や花をむく	、
	何佛もあはれまゐりて	、
	里のまゐりて	、
	山のまゐりて	、
	果てて	、
	まゐりて	、

芦野里	田一板柳をむく	芭蕉
後宿	名月や花のまゐりて	蕪村
舟をむく	柳風の橋をむく	言水
碓氷	柳をむく	、
新山	石橋や花をむく	、
三橋	何佛もあはれまゐりて	、
三橋	里のまゐりて	希因
三橋	山のまゐりて	、
三橋	果てて	、
三橋	まゐりて	、
希系	まゐりて	、

菘根

玉は船

玉は船

玉は船

玉は船

玉は船

玉は船

玉は船

玉は船

玉は船

根の上よりそへてさへる村のま

そへる川文井の月成るを

傍わきのまづふむくは

村のまづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根

菘根の上よりそへてさへる村のま

そへる川文井の月成るを

傍わきのまづふむくは

村のまづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

まづふむくは

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

とみせの河

まいつ毎月よりうらたを桂川

蕪村

高旗

西りのお日もあててまをる

源寺

笛の音ふはれしよりあはれな秋

山崎宗鑑

あつてこれあめりてん杜あ

極は池

あつ解のつまよふのやまふり神

隆余建寺

かてはと月さるるるる

宗とく依

庵のきや湯はさしはらうし

鳴戸

るの歌はししもあててあつ月

そと作

細きふぬあつてあつてあつて

一河思

蕪村

源太極威

響きあつてあつてあつてあつて

極は池

ふあつてあつてあつてあつて

宗とく依

あつてあつてあつてあつて

鳴戸

あつてあつてあつてあつて

そと作

あつてあつてあつてあつて

一河思

左吉

あつてあつてあつてあつて

宗とく依

あつてあつてあつてあつて

鳴戸

あつてあつてあつてあつて

そと作

あつてあつてあつてあつて

一河思

蕪村

三夕

改唐

自得

芭蕉

又後とも縁なきとてまはるる奴
 といかしくもさしとて中雪の枯屋
 きのひさしく断る程を我世に
 くるなり〜我を流るる枯の
 武士の大柄をさへ〜那
 さらさらの備を脱いで〜
 は備や〜も奴を伴もあふれ酒
 瓶破しく夜のはりの毒を
 さら〜あぬま〜も〜風の家

新古今

つひとまゝ

芭蕉庵記

雲外

月さひよ明きりまの海も

晴かしてた〜ひよるはすあま
 をや〜と〜を〜と〜
 我は又記はむ松と〜
 世の〜の〜ぬるや〜の栗
 少将の〜の〜しや〜の雪
 梅は〜の〜の〜
 さら〜も〜の〜
 美ら〜の〜の〜
 宗の〜の〜の〜

和角夢堂

物言自白

自問自答

禪是魔界

酒 後

折 郊系

倫 殺生

人ものぬまや 後ろくしけあ 芭蕉

朝顔よふあう 後ろくしけあ

ふまけふたふらふいそ友 雀

秋十とせ却ていんをさるる所

此秋をたうんてまきうをるる

縮手まふけりぬ人のさるるに

はなやうりかふ侍まする侍まふし

馬のまも酒言まると二 西

うそまもやふたふらふる習

うそまもまもふらふる戒の擧

其角

其角

鏡素堂

風秋のさるるふ二扇をくくるるり

秋もいふまき後ろくしけあ 上き

長崎をさるるまきまきまき

まき

拍りまき秋後の影鶴 不言

まきやまきまきのまきまき

覆ふまきまきのまきまき

蕉村

白印

まきまき人まきまきの中はまきまき

まきの月まきにまきまきまき

其角

自得

相生

五冊

五冊

其角

驚を驚て子猫を驚るん

其角

下

五月

五月

五月

五月

五月

其角

五冊の表紙

其角

壬生

辰辰

辰辰

嵐雪

楊梅の泣き人

其角

十

辰辰

辰辰

辰辰

辰辰

辰辰

辰辰

来山

儂くし給くしけのさぬ茶気味は
其角

四十ふさふさして死んてあはれ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

其角よとくくし給くしけあはれ
其角

御もつ砕くし給くしけあはれ
其角

十ふさふさして死んてあはれ
其角

月さきさき給くしけあはれ
其角

持てあはれなうし給くしけ
其角

限くし給くしけあはれ
其角

其角
廿五

天皇朝
御給所

大正
小正角

新書

御給所 樹をさきくし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

けしきよあはれなうし給くしけ
其角

其角
廿五

さうに

ふらふらと抱たふらふらと抱た

来山

懐舊

懐古

芭蕉居士の四巻成道

志望のふらふらと抱た

素堂

法皇の御年記の御成道

芭蕉

伊賀上野

さうにのさうにのさうに

玄堂をさうにのさうに

其角

能其

曲舞の初はるるふらふらと抱た

あつらひの桂の本をさうに

おふらふらと抱た

貞はるる懐古

蕉林

帯のさうにのさうに

かきかきと抱た

嵐雪

さうにのさうにのさうに

をさうにのさうに

素堂

抱たのさうにのさうに

芭蕉

さうにのさうに

嵐雪

古田社

むらうしんかやまきりくはる

嵐雪

むらんやま甲の下れまうりくは

芭蕉

余ふりまも楠ありて太ふ紀

素堂

懐古

え州や兵士ともうまのりくは

芭蕉

七年のまもりくはるまうり

来山

古人移舟をあり入

まふ古移舟移りぬいし秋そ

蕪村

忠則古墳一樹のねは待まう

月とまうねいしくまをる屋より我

清系とせ成屋より

瓶 七七

宗祇の殿

まうりくはるまうりくはる

嵐雪

る塔をなごりくはるまうり

述懐

老楽

孫をとも月をまうりぬ袖のうへ

来山

ねり塔をよごり我あり入るまう

身ひとりのまもりくはるまうり

るのまもりくはるまうり

贈答

後致

涼しと哉とあつてしと移す

芭蕉

いさよひきしつとせうとせうとせうと

隠れやと月と月と月と月と月と

こりりあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

本風
如水別神
本刺

新
大

龍波人福の針を新ひりて世人の白

をよみし中より大なるをよみし中より

指つて送りしれり

年郭より指の口ぬく山櫻のれ

其角

常釋よりやうしつとせうとせうとせうと

芭蕉

園庭より池のほとりてくそ落の音

白き花の代糸園田のうつくしき花

来山

縁のきつとせうとせうとせうとせうと

中よりしつとせうとせうとせうとせうと

雪のきつとせうとせうとせうとせうと

心ま初會

憶為多中

月代やし藤より成るさ月の高

芭蕉

根折て葉成はるさ人夢枕

嵐雪

ささめぬささめささめささめ

ささめささめささめささめ

朱山

梅そのえ

嘯を時ささめささめささめ

つたひささささささささ

つたひささささささささ

つたひささささささささ

ささめささめささめささめ

ささめささめささめささめ

雜 共

おもしろい本巻もつたささめ

具角

おもしろい本巻もつたささめ

芭蕉

暖かなるささめささめささめ

素堂

梅根子咲不えん保是の里

梅根子咲不えん保是の里

やさしくせんいっさの枝よなる日よ

西ふしとささめささめささめ

涼しとささめささめささめ

孫拾う文物のささめささめ

言水

南条研ら以丘を侍入

言水

楽のり

控の戻の癒もさうや おまじお 言水

糸浪門を一如上人借あてらぬ 言水

以ぬ目の風後を控のやうか

壬午余年一首新の保人改るぬを

壬午改への閑るう件

控吸るもさるうくや 松樺

色蕉り所まむて久くぬけりしに

いつくふに小車とらん茶の羽織 素堂

とひつとくともぬれよ友の炭俵 其角

いつくふのうの後をさるを命 其角

庵のあいに

新刊

會照

と葉のうらなり 十中 角 被

交りのさるて又よし 友 料理

花のやうなるはは さらのうらさる

及 和神よとくさるれ 是例して行

か のをさるに 外 抱せぬ 下 巻

年 去るの 食 養 生 也 凡 島

けいりも 去るの けいりも して

中のとくよ 茶 ぬる 養 人 けいり 石

けいりも して 西 巻 けいり して 教 師 けいり

後 巻 けいり して けいり

其角

躰のまゝ二万石の櫃にひたし 其角

冠里公備中ね山和入の時

川とる者や酒のさきを種より

汗濃くよ衣の背縫のあまきり

或人のまけら成りて

こぼるるやまひまきつて

けをばらばらしくは浴衣のひも

のりまきつては

眼鼻よあの子おまじり

園のね乃さうまのり

山田守

号新様好

芭蕉をこらして

そらや十日までも同くは先

たまひいそるはけの梅干さうて

梅いりり 閑伽のおあま

四月廿二日冠里公備中

葉刻その上子を振る

雪のまのまなりをり

めねさうむつま

まなま成るけく人

ねりし

らしを

秋天和尚のゆく

夕顔よりつらき色紙のよきよき書名号

坊主小僧のたふして人々小僧のたふして

かたがれを

坊主小僧のたふして人々小僧のたふして

色紙のよきよき書名号

裏光のよきよき書名号

孝法の子孫のよきよき書名号

秋葉録のよきよき書名号

合羽のよきよき書名号

室七

感徹和尚のよきよき書名号

北のよきよき書名号

九月九日のよきよき書名号

そとやうきよきよき書名号

二軒茶屋のよきよき書名号

そのよきよき書名号

芭蕉のよきよき書名号

其のよきよき書名号

春のよきよき書名号

まゝのよきよき書名号

其角

其角

切悠亭

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

人の世

人の世

人の世

人の世

人の世

人の世

人の世

人の世

人の世

人の世

人の世

故人曉羞ぬく 东山西野と冷り
とく時をさるる 秋の夜

或る生り
かきとて

身とまじり 梁の月け 嵐の那

蕪村

古危より 茶釜をさく 揺らぐな

東山の林下に 住まひて

トきくく 一言はゆい ちりきり

嵐をきき 婦やうし 引合ふ 健もあや

せまて さて 人のまに ありまはれり

来山

抱き糸 編みゆい ちりきり

よれり ちりきり ちりきり ちりきり

せませし
人のまに

翁世九

画讚

は鹽湯
ついで

雪のりふのうらうら ちりきり

しりしり やらうら ちりきり

糠 早中 笑りて ぬのまも ちりきり

芭蕉

ちりきり 馬車は 骸骨の 備へて ちりきり

ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり

ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり

ちりきり ちりきり ちりきり ちりきり

ちりきり

楠正成像鉄肝石心以人之情

梅よりかゝる涙や梅の露

芭蕉

茶臼より移むる露

清き水よりとく起る人おのる

善ぬ法沙路

梅のさぬうらむそ氣もなうらま

柳柳観音路

青柳のわさうらむとふれ

いのちのうらむとふれやそふの梅笠

幼名やそふぬるの丸路中

貞徳像

自画讃

新四

竹目の画

竹青く日赤く雪まゝの隈

素堂

ふさふさの女湯あつてをゆり

笠さうらぬりの路

葉をさうらうらうらうらうらうら

其角

山をさうらうらうらうらうら

友の角指のさうらうらうら

心もさうらうらうらうらうら

餅子おやうらうらうらうら

三杯うらうらうらうら

仲磨の画

國らの画

寒芳画

くらくらふゑ十布や一袋をか 其角

月くさやし古成帆よましくとま山

さあしうそくさくくくくくくくく

らまきうーくくくくくくくくく

芭蕉の自画十二猿周之瀆

師の坊の十年きくし抑一信

浦崎うたよりの暮くさるの夢

水相叙の終

ふまきくくくくくくくくくくく

を井ふくくくくくくくくく

大板画

張良の圖

維摩の瀆

傘おろく月よ後くくくくく

兵のひりくくくくくくくく

好女小むくくくくく

篠のともや一袋よちかてはそ水

狗舟の兵よよ千くの月

布袋の月を擲る終

もくくくくくくくくくくく

山のともく大流るりたりと床の月

いっくくくくくくくくく

扇よ瀆くくくくく

舞や海のそねを垣根うゑ 其角

いさぎよきまはるのついでかたひめて又

軍路かきこらりしきこにせん

そらやせし終入再々しうひて

涼風やふしをまゆく女は

舟よ蜻蛉の葉をまきし終よ

なよ舟のこらうこらわたりし

こ帆葉もはるるるるるるるる

拾得の風巾しよかきもや玉帯

かき終るよぬるもかきや虎の耳

るまの
終よ
ま
拾得
四睡の圖

雜字

舟かたをこらうこらわたりし

こらわたりし

月さるもかきしよかきもや玉帯

青柳の歌の掃やしとくの月

意中しつ終るもかきしよかきもや

乙子のまき終るもかきしよかきもや

終るもかきしよかきしよかきしよ

まきしよかきしよかきしよかきしよ

まきしよかきしよかきしよかきしよ

うらみよの曲まきしよかきしよかきしよ

傾城の傍

柳邊圖

まきしよかきしよかきしよかきしよ

まきしよかきしよかきしよかきしよ

金川の
澄

保昌のちうへん引くかう朋さう

其角

夏
画

藤のむらねかて歌をいへ情より

三葉のよとあしつう法

芳中いふぬきなき朝日山

福福夢の澄

世に日や一年のうへんを歌はり

二人静の歌をいへ

なつこかぬこささくふとふ

幅
幅

幅幅のふゆきつうし車百合

引
引

引引の持てかきつうしつうり

雜四十三

破
破

破のうへん後葉の持てつうし

袋
袋

袋のうへん後葉の持てつうし

布
布

布のうへん後葉の持てつうし

小
小

小のうへん後葉の持てつうし

指
指

指のうへん後葉の持てつうし

蟹
蟹

蟹のうへん後葉の持てつうし

小
小

小のうへん後葉の持てつうし

大
大

大のうへん後葉の持てつうし

大
大

大のうへん後葉の持てつうし

嵐雪

頼光山入の後

なまなまの風おとすりし山樗 嵐雪

小所後

我意よ月も鼻もたれたるのを
柳中へゆくしお新しや樗とてい

八幡を布の後

此切てさしぬ劍のひうらう那

寺後

柱木も着けりしなくれゆり船

陶弘景後

山中の相雪中のちとんうま

燕村

猿丸後

絨つてよとゆをさゆひくや秋の雪

雑 四十四

武者後

清い掃りたるのさうれおのかりし

大の雪

ふのうらみの雪より吼ておまの秋

舟後

志はるひとねもたれいけ武蔵坊

梅

うらひさやいさるるる新の梅

こととままよくやれうま女い那

若文時

泥中よまんうら

河を龜や青砥もさうぬ山清り

英一様之画の後

四五人よ月をさうりしおあつりま

老女の火をさうりし居る連りし

香尾
墨画

小舟の炭白く火桶のいろをえり
濁くともなほもゆるるるを
来山 蕪村

詩文詞

水舟

おるるをきし 吳夫よ雲霞をみるは
又持て香付るる 葉のふり
言水
後志深水

関白 輔公濟前より員外 花文松と題

新會春

家つとくし 櫻のいろむ小ね系
村必逃杯是似雲出仍大酒盛と
はてきり

此忙をくもさそて 舟をけり
離る極木の舟人 櫻白

手握蘭只合鷄古

ゆはりのそら平 口よぬくそそ始
一片花飛減却春
はくし 舟人の子 櫻白
風入馬蹄 櫻村

本の下ろ蹄のうせやまゝさうと 蕪村

琴心桃美人 蕪村

妹の垣根さそくせんその花咲ぬ 蕪村

和古詩 葵うを焼てあゝ翁成者う叔河津 其角

逐歐陽公賦

愧りふれえよ辞たさき悟さうと 其角

酒債の昔往知有人生七十 其角

古来稀

行らるゝん心も年成合う酒債ま 其角

佛骨表 志らるゝん心も年成合う酒債ま 其角

春色人間總未知

困るゝ大工冬しきり室のむせ 其角

茶色 焼うさる葵に恨の柳しり那 其角

妻驩詣 荆のさゝ根さししや猿さるも 嵐雪

和心水推敲之句 其角

ささく時ささく月ささく梅れ門 其角

夜學感 夢さるあや憶燈かさるあ羽閉て 其角

射者中変者勝

愧りよいつさういりける懸さうと 其角

志梅やしきる翁ま又ひとん 其角

詩經 標有梅

茅舎買
讀莊子

氷若く偃氣咽を潤せり

芭蕉

彼をく嵐をさの梅のうら

其角

みちくせの梅のうらぬきく

蘇東坡

色よとよきるるにおひしりて

其角

いって我七るのゆき葉よるん

其角

寂蓮

おがりの骨枯るるの夕ぐれ

妻觀詰

長唄の紀よゆまれ寂きとて

其角

茶也

おふゆとてりてさげしり

其角

おふゆとてりてさげしり

紙子の人のまをばそそく先廣

雜四十一

姑車

のうをさるるの空けり

程のうをさるるの空けり

井苑のうをさるるの空けり

よきとてさあかむ

おせ者のついでとてり

おせ者のついでとてり

一をばもらほさぬ葉の氷う那

遍照海のうをさるるの空けり

んをさるるの空けり

かしのあけをさるるの空けり

芭蕉

故事

おのの悔くと縁を

衣文あまのりぬる経流への流 来山

人間一生不醉不醒

あまの流中一年中の氣はひ

あまの流中一年中の氣はひ

一いつくさくさあまのり子孫の中 芭蕉

岸風又流るる位はるは

来ひまのえ位うさあまのり 其角

雜 四十八

祈禱

帯力小島部入道引玉の流の

小袋ふんと風流のいさく下略

山吹中井子流流るる流 扇 蕪村

中納言藤原卿於馬場辰龍馬

うけり直練をさすふりし其

言末如鏡

乳をさすいさみの柳成さその流 嵐雪

父の...
...
...

秋...
...

芭蕉病床

...

其角

無常

芭蕉墓

...

其角

雜四十九

癸酉八月廿九日の昼亡父葬る

...

...

...

...

...

嵐雪

追善

悼

芭蕉墓

...

其角

芭蕉翁
百廿日

雪のむらさきやむらさきや
其角

もろくはなほ雪の化の作

信海の雪のふりし

かゝる雪のふりし

雪化きぬ白ひ雪のふりし
嵐雪

芭蕉翁

百廿日

口墓翁

雪のふりし

十月廿五日共桃隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

上略

雜五十

雪のふりし

十月廿五日

十月をふりし

四十七

木かじりの様も

十一月十日

雪中

雪のふりし

雪のふりし

朝更一周忌

嵐雪

春ふくむひとくしつて一月忌 嵐雪

本紀寺許年忌

日の支那ももるり休折りな 希因

去くはくやいも母をを墓を 其角

永西法師のつとまをすさのち

一せをさうりていせをさうりて

秋ふくむひとくしつて一月忌 蕪村

風帝を毎七回を穿月歌

まの月波をしろくしん梨を菊 沾徳

まを成る七回忌

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

其角

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

嵐雪

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

其角

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

其角

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

沾徳

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

其角

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

其角

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

其角

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

嵐雪

春ふくむひとくしつて一月忌

春ふくむひとくしつて一月忌

其角

糸の端よりなる木魚抄 嵐雪

西齋十七回後書

秋の板の吸はく石や一むし 言水

その角の母を悼

あはさるや何もの花は咲つらん 芭蕉

口九悼

あはさるや何もの花は咲つらん

少年は笑ひて人の心は

其麻

埋たもよもや涙の流るる音

涙もよもや涙の流るる音

嵐雪

晋子退善

擗賣あはさるの涙の飯とる

嵐雪

雜 五十二

秋の端よりなる木魚抄

その角の母を悼

あはさるや何もの花は咲つらん

悼少長

あはさるや何もの花は咲つらん

素堂

下海追悼

あはさるや何もの花は咲つらん

言水

馬九亜相の指の風とる

あはさるや何もの花は咲つらん

其麻

久孫四のとき

かくもあはさるや何もの花は咲つらん

秋の端よりなる木魚抄

其麻

世成ふくく 栲切の風とあはれり 沾徳

昔にさされし後さるるもなき

そる人

稲妻やあつたふくふくかきつゝ 其角

ぬきあつたふくを悼

折釘をかほしやあつた秋のせき

以人よ二百十日をいささかして

危ねもよ成さるるもさるるも

宝永三戌十月廿二日好身重女

葬りし日

吉田氏
悼朝豊

湖春を
とむ

春のさるるよぬらんも 穢られし

はくはくをいささかして

昔にさされし後さるるもなき

そる人

稲妻やあつたふくふくかきつゝ

ぬきあつたふくを悼

折釘をかほしやあつた秋のせき

以人よ二百十日をいささかして

危ねもよ成さるるもさるるも

宝永三戌十月廿二日好身重女

葬りし日

身もろくそ衣もろく入らまじり月が 其角

つらこの杜園前をいそぐせたる

よ〜と誠人よ〜とやんやん

着るもむつや〜とて着るいふ

又ほろろと〜とさまたつ

はそれきつむ〜とてあひひて

羽ぬきもむ〜とてさつとて

七十余の老醫をいそぐとせむ

〜とてさつとてさつとて

めがけをさつとてさつとて

雑五十四

そ〜とてさつとてさつとて

人よ〜とてさつとてさつとて

〜とてさつとてさつとて

六人もかお〜とてさつとて

柯求老人の自向

山系花や〜とてさつとて

大町亭法〜とてさつとて

法のを〜とてさつとてさつとて

市川牛追善〜とてさつとて

〜とてさつとてさつとて

其角

塗敷の父をたてしめて中務の守 其角

仙石を改守殿四月五日方より

強ひぬ玉美らまは悔しとありて

介様申してま向の梅をぬきたり

故赤穂城主浅野少府監長矩之

舊臣大石内藏助等四十六人同

志異体報亡君之讎今茲二月四日

官裁下令一時伏刃齋屍

累世の仇はけり黄台成ひまろし

掃杆をほくらぬく

妻悼

うらひとまよひあはぬいなき

尸の形枯枝かろしやむらさき

方懸木のちるや母をなほとて

悼昔流亡妻

物とふまあるこもれのあまはる

十一年のあはるの言みのあやうし

弱ゆりのこもれのあやうし

里右の娘失くさる

鬼行のこもれをほらむと教部

こもれのこもれをほらむと教部

立志通書

義仲寺師父の教

をくしむたつりきりてあはれまふ嵐

嵐雪

水たつまあはれまふらん

たつてふもみかたふたふたあはれま

悼晋子

をまかりつゆきりてあはれまふらん

来山

西の山

くまきりてあはれまふらん

年月のあはれまふらん

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

雜六十

湖ふり又のあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

集軒

くまきりてあはれまふらん

悼み海

播磨のよきと云うや寺の森 蕪村

麦刈ぬ近き草中せ 法之杖

秋の月相又毫むむみしを 来山

ふるほつみよるれをいそむ

啼きもさる人の情の片想いれ 来山

古く昔を悼むるの原 蕪村

葉裁き身の白くもよもや 来山

雑題

吾妻の長題あり

廻文

吾妻

晴るる心幸ひるのぬるむこ那 芭蕉

持人のぬれやとて火あかり 其角

蟻のくも又白くくもぬるのこ 来山

十三弦国年と表して

岩のね個子あつてと年より 来山

出代う画の彩を凡し涙の煙 素堂

玉川のあふみかきこも

あけの霞にやとまへ 其角

蝶のきく尾上の杉をいそれとり

鈴らるる月を落さ海の味 其角

後、屋を編むに定むるは、戯れ也。其角
鬘のきぬ木絨のひとぬ、括りたり。

漫成五倫

君臣有義

ゆゑのふきとさうとをさうとさうと

父子有親

鈍けや、情を娘ををけらるし

夫婦有別

解らぬれぬれとぬぬとさうり

長幼有序

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

精、若くは娘のこころもさうとさうと

朋友有信

天と地、娘のこころもさうとさうと

後、昔、異邦の佛、濫禪師、十年

の景を、して、ふたつ、おぼしめし

牛、を、さうと、娘、育、り、又、及、ぶ、能

く、な、さ、う、と、さ、う、り、と、さ、う、と

尋牛、や、し、れ、お、さ、う、と、さ、う、と、月、お、か、

呼牛、よ、う、と、さ、う、と、あ、い、わ、な、さ、う、と、さ、う、と、ぬ、が、

隠牛、こ、る、の、お、も、お、ぼ、し、め、ぬ、氣、の、起、り、たり

其角

其角

貧牛 二朱利やと頼ううも年男 其角
 廻牛 小使も免ふらする又月、つま
 番牛 智くまに夜傘をかたせきり
 無牛 さうくは枕も麻も子履も
 半牛 何となく久あさるうとまきり
 送牛 さきまのうすも信屋にやまのう
 老牛 考ふもよも人のうらむ
 於冠里公各器五を梅
 黒梅 やし毒の潤へのあさる人
 或あきよ新しは五と梅のあさる

能 睡 寝るにふたふともあううう
 能 忘 ぶとくま七年かたてあうも
 能 捕 鶴くまを籠の味を向てまし
 能 取 陽あるとまきりうはねん
 能 馳 雲のいろもあてまきりし
 能 酒 飲 花の酒う房を酒さぬま
 能 豊 年 ぬう味もまきりうはねん
 能 川 流 川を流すまきりうはねん

能 流 川
 能 流 川

大小の吟へ福十丁五年
大角をさく^四く^六く^八く^九をあはせが
其角

格枝亭抄くくしふ

乾^ヤ兌坎震離ス艮坤巽

その中我々のうちにはあつてゐるものは
とぐらうづらつ羽鳥のそくはな尾末
嵐雪

夏畑折くくくくくくく

切味等のひまひまひま

そのまに干ひひひを金ひ

茶碗銘

茶碗銘あつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

田文

きいたんとのちやまの富田酒

其角

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

雑六五

附録 温故集

憂あを道りさそり嵐うね
 多しをさるるの程さう寝しぬ
 山に雲を操さうなる海舟
 又月をさるるの程さるる海舟
 うるさうさうさもくはハ時を
 けいさうさもさるるの程さるる
 観しもの終さう涼し枇杷の枝

推中
 大綱言 定家卿
 西三條 為世卿
 近衛殿 實澄卿
 鳥丸大綱言 信尋公
 鳥丸大綱言 光廣卿
 鳥丸大綱言 西武
 鳥丸大綱言 光廣卿

うねくまふまふかたのき
 鳥丸大綱言 光廣卿
 小田原のゆふのあめせ
 大閤 秀吉公
 乳も標る角力竹をひく
 八幡太閤源 義家
 頼朝卿
 右大将源
 島庄司 重忠
 大閤 秀吉公
 細川 玄旨法印
 ささく 先老の敏をもの
 小堀氏 宗甫
 長崎九段門
 師宗
 深水三河守入道
 宗甫
 雑六

後世のうまふまふかたのき
 細川 玄旨法印
 よしや 徳也まふかたのき
 西條上子 春
 改まのうまふまふかたのき
 半井 卜養法眼
 西岸寺 信口上人
 鴨 長明法師
 紫野 一休和尚
 深草 元政上人
 東海寺 澤庵和尚
 紫野 一休和尚

紫の雲のう上や南禅寺
 高野山 昭乗
 は方の雲にさして死るやを袋
 紫野 楚仙上人
 てんくの耳味よもつらうの月
 愚道和尚
 大つらの雲乃あつてや梅下
 西岸寺 任口上人
 花よふは後ほりうれて炭 俵
 正三長官 常和
 りあをばや岩井の庵人
 宗祇法師
 みまろ様さうのわびと紅葉
 心敬僧都
 九つのお川 志るま違う那
 牡丹花 肖 栢
 るるるるるるるるるるるる
 雑六十七
 橋の雲よせつらうて梅ぬおや
 宗長法師

ちりくろ毎よこころうて
 櫻井 棊 佐
 雲の袖にういこほの天の川
 宗養法師
 りあ糸藤やけのつちまめ出まは海若
 周阿法師
 はるるるるるるるるるるるる
 風谷のあ
 里村 法橋紹巴
 梅の雲考たつころはと草もか
 狩野 常 信
 りあ糸より名るる古えうし厨の雲
 瀬戸藤四郎 春 慶
 淋しこのなままたなる火桶これ
 千利休
 りあまれち路中成ゆるせ糸を月
 曾呂利 新左衛門
 祇園今や冷後さうく川の山
 蛭川新左衛門 親 當
 糸芥よのま糸帯とむるたふれ

えりや み代のこもぬりもろく
 え日のえろをのよせん不二の山
 鳳凰も出よのらきき酒の年
 極る田の秋またひくや秋は
 あくま揃ねる下紫の何るが
 貞徳宗道成始て先年の時
 ちよと採るふ信んけい傍か
 まちちのさきんたひくもぬる神

荒木田

守武

山崎

宗鑑

松永

貞徳

宗祇法師

九條殿下号致山公

兼孝公

貞徳

○中古引

吹ぬ日や梅もふらふらとあはれ
 ちよと採るふ信んけい傍か
 まちちのさきんたひくもぬる神
 ちよと採るふ信んけい傍か
 まちちのさきんたひくもぬる神
 ちよと採るふ信んけい傍か
 まちちのさきんたひくもぬる神
 ちよと採るふ信んけい傍か
 まちちのさきんたひくもぬる神
 ちよと採るふ信んけい傍か
 まちちのさきんたひくもぬる神

淡々

敬雨

免貫

素丸

存義

湖十

盤谷

平破

山加やし麻のふらむ番 椒
 投らまし角カやみよねの歌 肯原
 風いぬ人の目かやけりるま 紀逸
 ふまありとまは懸きしいうのちり 千代
 雪や山低うしとまぬし 涼守
 雪よさらしうなふて人易し 竹阿
 不ろくともそほろの故をや 瓢水
 蕨入のうほまをくしまの宿 大祇
 青いふともや海まむく雷の音 麦水
 浪や浦や細くもつらん困まら 風律

雜六十九

風のらしきひまより初さるる 樗良
 夕月や月よりかえ隈もなし 蓼太
 落ちる末は雨の者の様大いま 白雄
 あり落る風のまゝ四つしつな 蝶爰
 雪のまや中絶う羽ささのうたぐら 康工
 くらねやま日さしつらくる東山 羅人
 おもやゆさしきもさして早月お 巴人
 葉のまやや暖縁を限りの東山 竿秋
 肩こころもやとえて居る横いさ 吞江
 女をものたまよりさるらみしな 青蘿

藤の葉のつゆをいりたり 藤のつゆ
 ちかやうらまの異うらなをそとに名倉
 ひとりあまの物をかへるまゝく可也
 けりまゝく横はむせふらりしうま
 卯のつゆはまゝの体さけりこれ
 蟠蟠やうらめめかた人まゝに
 へるまゝもまゝくまゝに山はつ那
 弓ななるまゝに合まゝに櫓これ
 森まゝにて伏待の月まゝにうれ
 釘さるるまゝの板や木下宮

曉臺 諸九 鳥酔 闌更 富天 一音 仙鶴 大魯 風狀
 雜七十

なを待傍まゝにまゝや夕柳
 儂のまゝにしてはまゝにまゝのぬ
 私まゝにふんかたりや 傍相撲
 鞍車やまゝのまゝに取のまゝに
 まゝにまゝにや合歡のまゝに風の前
 山のまゝにまゝにまゝにや 大まゝに
 ねまゝにや 命のまゝにのまゝにせ
 一筋もまゝにまゝにまゝにまゝに
 ねまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

舎持 車蓋 几董 枕山 宗讚 宗屋 佛仙 移竹 也有

追加

晴切くさる士やそつそつ日枝の山
 芥又まきくみぬくちおとがうりま
 号や一日まことのくほれね
 まく梅やふいふむむきいぬの林
 裏むくも東山まの枝 ふまき
 人中よかきまきまぬ柳
 振の葉やと粒うりても秋のそ
 ふまきくはらう折さん時まきく

山
 嘯山
 二柳
 素外
 完来
 重厚
 旧國
 長翠
 五明

雜七十一

河のこのそまきも今よら入の菊
 きくくくくくくくくくくくくく
 戸ぬまき我ふまきくくくくく
 いさよひち宮のたけりも月おが
 冬のあるまきさふより流まきり
 心の井やまきをぬきの乃まきり
 國のうや木の葉捨くむけまきり
 長さおあやふまきの尾とまきり
 そのまき本まきりりりりりりり
 十月や葉の葉ふおくくれ

三千彦
 竹巢
 午心
 士朗
 夫左
 恭昌
 都雀
 瓦全
 石葉
 貞雅

けりし梅むきの嵐となりまう
 梅の枝はなまの月夜も
 あよよれき水又りつさひうか
 梅麻や葉おて人を驚かす
 木の市虫黄ひとう閑なり
 おくくくくくのれき成やあか
 梅梅の跡を言やならにきり
 女もよ魚をひらるゆふゆふ
 おくくくくくくくくくくくく

喜齋 玉屑 成羨 班旭 可都里 方廣 蒼虬 凡坊 月溪 閑叟

雜七十三

晴の泣くもくくくくくくくく
 ちりちりくくくくくくくく
 公條のくくくくくくくく
 空もよ人の中より秋のいせ
 後の月垣輝くあまきまりきり
 鳩半りちりちりちりちりちり
 漏るる成るるくくくくくく
 藤のむきくくくくくくくく
 志のぬきやむくくくくくく
 或時を風よりくくくくくく

春蟻 道立 五来 樗堂 青橙 麻古 尺艾 一州 鐵船 自樂

うららふらふはぬくうらら小おた
 知くくも湖よりうららおた
 湖を一日おたをうららのうらら
 日の影のおほらうららうらら
 初雪のきくぬき雪のうららうらら
 初日新く雪をうららうららの
 やふりやうららうららうらら
 うららのうららうららうらら
 うららうららうららうらら
 うららうららうららうらら
 うららうららうららうらら

魯隱
 長齋
 羅城
 宰馬
 東瓦
 買明
 木采
 空阿
 石人
 萬井

煉うせのうららうららうらら
 きくくくくくくくくくくく
 うららうららうららうらら
 中くくくくくくくくくくく
 恐くくくくくくくくくくく
 葉のうららうららうららうらら
 うららうららうららうらら
 うららうららうららうらら
 うららうららうららうらら
 うららうららうららうらら

右稻
 若翁
 月化
 宰町
 田禾
 子坤
 梅價
 路人
 布舟
 寄淵

言の重き老のさし傘はたむむ
 木の香のあらうら香もあはれ
 とはくくとふる清くそりの川
 かこほつうかよそは花や似てん
 花のいと柳よあつりそそそお
 ひくささのあふちさえて番椒
 来るや杖とまらりの肘ひく
 里人や嫁り知風さくぬら
 大橋のおとよささくやまの雨
 笑むは月月の膝のゆるれさるぬ

馮月 百池 宗石 友國 鶯雪 其成 九十 柳莊 丁江 菊明

羅七十四

夕らや人のふりしる城さる橋
 半月のふむしるぬらほまを念
 夕らほのゆふ紙まをさる餅
 南のふむしる月さるあふ
 夏さるのさるしるはさるけりし
 夕さるのゆふ柳さるさるさる
 秋さるの霧さるさる月さるさる
 我者紙牛の白さるさるの月
 ぬり桶のさるさるさるさる
 さるさる人の物さるさるさるさる

方和 且々 巢兆 守中 葛三 鶯肝 草池 蕉雨 猿左 其由

羅七十五

月アヤシ〜無〜人ノ目ヨウモ
 嬉程ノ〜中ノ〜
 妻ヒトモ〜
 蜂ノ〜
 後ノ月人未ぬ〜
 夫〜
 乃〜
 有明月も霧の中

乙因
 一茶
 吕蛤
 北豆
 蜂友
 雄鬮
 騏道
 素雪
 懐仙
 斗八

羅七十五

月アヤシ〜無〜人ノ目ヨウモ
 嬉程ノ〜中ノ〜
 妻ヒトモ〜
 蜂ノ〜
 後ノ月人未ぬ〜
 夫〜
 乃〜
 有明月も霧の中

泊帆
 平角
 升六
 駝岳

俳諧十家類題集雜之部終

寛政十一年己未五月

京都書林

野田 治兵衛

井筒屋庄兵衛

心齋橋筋博労町

大坂書林

奈良屋長兵衛

同 北久太郎町

河内屋喜兵衛

同 唐物町

河内屋太助

同 北久太郎町

塩屋忠兵衛

雜七十六終

藏板

Handwritten notes and a red seal at the bottom left of the page.

